

おはようございます。

長崎大学人、河野茂です。

新たに長崎大学の一員となった皆さん、改めて、ようこそ長崎大学へ。長崎大学では月に1回、「月曜通信」として全ての学生、教職員に、このようにメールでメッセージを送っています。

以前は学長からだけでしたが、昨年度からは、各学部長にも参加してもらい、月ごとに交代で配信しています。

今回4月は年度初めということもあり、学長の私からメッセージを送ります。

さて、この2年間は、何につけても新型コロナと、その学生生活への影響が話題の中心でした。

現在も、春休みや卒業式を経て再び急速に学生の感染者が増えています。

感染拡大防止のための行動制限は引き続き守っていかなければなりませんが、これだけ長期にわたり、何度も感染の波を経験しているうちに、社会の状況は少しずつですが変わってきたように思います。

もちろん、コロナ前と同じ状況に戻るものではなく、例えば、大学の講義の形はオンラインと対面のハイブリッド実施が定着しつつあります。

セミナーや講演会なども、リアルに開催できる場合であってもオンラインを併用することで、聴講する人が増えるなどのメリットがあることが分かりました。

日本の西の端に位置する長崎大学にとっては、人数だけでなく、より広いエリアに情報を発信できるというメリットもあります。

少し前には「ニューノーマル」という言葉がよく使われましたが、その時はどういうことなのかイメージが付きにくかったかもしれません。

しかし、試行錯誤が繰り返されるうちに、コロナ前の形とコロナ対応時の形が、自然に折り合いの良い状態に収れんし、文字通りニューノーマルとして定着しつつあるようです。

このように、時代も社会も確実に変化しています。私は呼吸器感染症の専門家ですが、衛生環境の整った日本において感染症で多くの人が苦しむとは思っていませんでした。

そして、2月24日にはロシアがウクライナに侵攻するという、これも想像もしなかったことが起きました。

国連の常任理事国が他国に軍事侵攻をするとは、2つの世界大戦を経て人類が作り上げた世界の平和の枠組みを根本から覆すものです。

現実には国連は、安全保障理事会の拒否権を持つロシアが当事者である戦争に対して、早期終息を促す役割を果たせず、戦争は長期化の様相を見せています。

このような大きな変化を前にした時、私たちには倣うべき前例がないため、対応に苦慮し、立ちすくんでしまいます。

そして変化の幅が大きいほど、その変化した部分に意識が行き、振り回され、右往左往しがちです。

もちろん変化に付いて行くことは大切ですから、それもある程度は仕方ないでしょう。

しかし、変化が大きければ大きいほど、もう一つ気を付けて欲しいことがあります。それは「変化していない部分は何か」を探すことです。

視覚と同じで、私たちは、動くもの、つまり変化したものは気づきやすいのですが、動かないもの、つまり変化していないものには気づきにくいものです。

これまでに経験がないほど大きな変化の中で、それでも揺るがず変わらないものは、それだけ重要で本質的な事柄である可能性があります。

見つけることは難しいかもしれませんが、その変わらないものをしっかりと意識し、共有することで、変化の波を受け止め、より良い対応が可能になるはずです。

コロナ禍や戦争という、経験のない、しかも私たちの生活に大きな影響を及ぼす変化が起きている今だからこそ、そのような視点を忘れずに持って、新年度をスタートさせてください。